

やすなが た
国史跡 安永田遺跡

鳥栖市教育委員会



調査風景

鳥栖市の北東部、柚比町周辺におよそ15haもの広がりをもつ大きな遺跡で、もともと大規模な甕棺墓地の遺跡であることは知られていましたが、昭和54年の範囲確認調査の時に九州で初めて銅鐸の鑄型が発見されて大きなニュースとなりました。それまで北部九州地方に銅鐸はないと考えられていましたが、銅鐸鑄型の発見によって銅鐸が作られていたことが明らかになりました。この時は小規模なトレンチ（試掘坑）による調査が実施されましたが、さらに詳しい状況を知るために、その後2年間にわたり本調査が行われました。その結果、ここは弥生時代中期末（1900年くらい前）に銅鐸をはじめ銅矛などの青銅器を製作していた特殊な集落、いわば弥生時代の「ハイテク工場」であることが判明しました。現在、本調査を行った地区4400㎡が史跡に指定され、出土した銅鐸鑄型5点、銅矛鑄型5点（うち1点は昭和58年の調査で出土）の計10点の鑄型片が、一括して国重要文化財に指定されています。

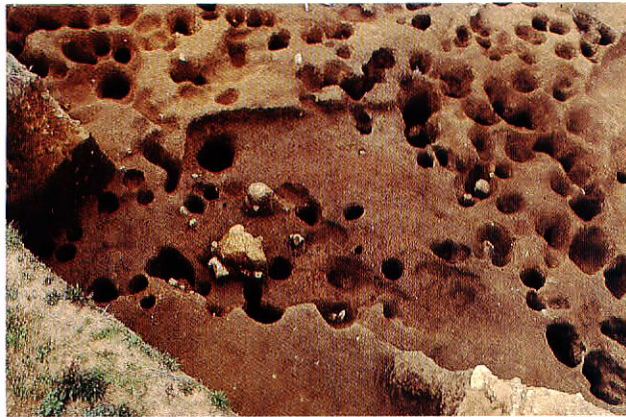
調査地区は、北方向から狭く深い谷が入り込む地形で、この谷頭を取り囲むようにして49軒の竪穴住居跡がみつかりました。このうち36軒が弥生時代中期の後半から末にかけて（約2000年前）の住居跡です。これらは北東側をほぼ南北に走る幅約5mの溝で区画されています。南側からは弥生時代中期前半（約2100年前）の甕棺墓36基とそれに伴うまつりの跡（祭祀土坑）が3基みつっています。集落はこの墓地を避けて営ま



1年次調査地区



2年次調査地区



銅を溶かした炉の跡

れていたようです。

谷底に最も近いところからは青銅器の原料を溶かしたとおもわれる炉の跡がみつかりました。谷底に作ったのは谷間の風通しのよさを利用するためとおもわれます。

遺跡の広がりを確認するトレンチ調査も行われましたが、その結果、前に述べた溝がさらに東へ伸び、住居跡も同じように広がっていることが確認されています。

昭和58年には、九州横断自動車道の建設に伴って荻野地区公民館が安永田遺跡の範囲内に移転することになり、事前の発掘調査が行われましたが、ここからも銅矛の鋳型片が1点出土しています。

鳥栖市教育委員会では、平成5年度には、現在くすり博物館がある場所を、平成6年度には市道荻野柚比線の拡張工事に伴って調査を行い、いずれも弥生時代前期後半から後期初頭にかけての甕棺墓が多数出土しています。これらの甕棺墓の中には、刺されたときに折れたとおもわれる銅剣の先や、石剣の先など武器類



くすり博物館用地の調査 (平成5年度)

が入っていたり、呪術的な意味を持つ貝輪じゅじゆつぎを装着した人骨が入っているものもありました。

また、鳥栖北部丘陵新都市開発に伴う調査でも平成6年度に調査を行いました。ここでは弥生時代中期中頃から後半にかけての墓地とともに、それよりも早い時期の中期前半の住居跡群が確認されています。